

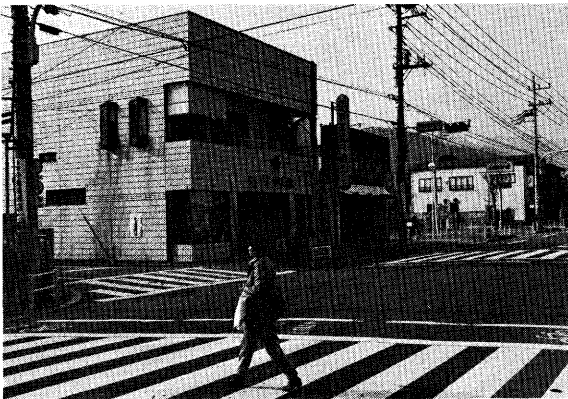
# 郷土あかし

郷土館だより  
第20号

五日市町立  
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

## 五日市銀行物語

### 秋川谷金融史 その2



▲旧五日市銀行本店跡 モリタ薬局



▲土屋常七家跡 埼玉銀行五日市支店

#### はじめに — A氏とB子さんの対話 —

B 「五日市銀行」ってのはじめて聞くわ、そんな銀行あったの。

A それがどうして本格的な銀行で、五日市本店の他に八王子と立川に支店を出していた。

B いつ頃の話なの。

A 明治29年から大正13年まで28年間だ。

B 明治・大正頃の五日市って銀行を作ったり、鉄道をしいたり、仲々やったもんね。

A 五日市には江戸時代から林業と養蚕機織という地場産業があり、秋川谷の商業センターとして栄えていたので、その地力をもって明治の近代化に対処したからね。いまの五日市とはチョイト違う。

B 「五日市銀行」の最後はどうなったの。

A 八王子の「第三十六銀行（通称サブロク銀行）」に吸収合併されたのだが、有り体ていに言えば創設者の土屋家に殉じて倒産したのだ。五日市一番の旧家土屋家は

第一次大戦後の不況のあおりで破産したが、これは五日市にとって大変ショッキングな事件だった。あれから70年近くたった今、1つの歴史物語として「五日市銀行始末記」を話そうかね。

#### 1 五日市銀行の出発 — 質屋から銀行へ —

江戸時代の金融は専ら質屋たのもしによった。また頼母子と呼ぶ無尽も盛んだった。末期には田畠山林の質入れや売買も盛んで有力者へ土地が集まったが、農山村の果てまで金の世の中になっていたことがわかる。

明治に入ると各地に貸金会社が発生した。彼らは高利をとり、法規をたてに担保地の売立を強行した。明治17年に発生した秩父事件はドライな金貸達に怒った負債農民が起した騒動であった。

資本主義社会の正常な発展を目指す政府は、こうした公共性の欠如した前近代的金融の改革を図り、明治26年「銀行条例」を施行して近代的な銀行設立への道を拓いた。たまたま明治28、9年日清戦争の戦捷景気による

## 五日市銀行年譜

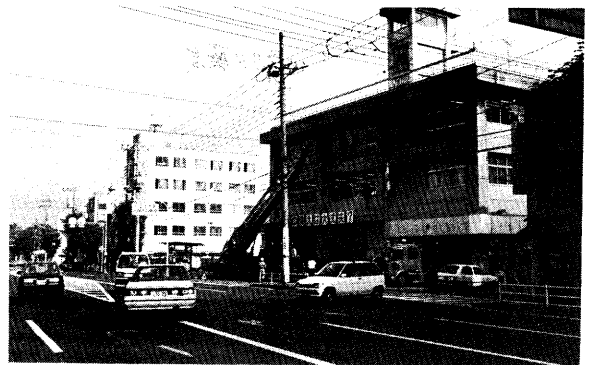
<p>明治29 <b>五日市銀行設立 資本金8万円</b>          3・31 頭取 土屋常七 織物仲買商          副頭取 内山安兵衛 質屋・林業          取締役 島田六郎 羽村名望家          支配人 松本伴次郎 質屋・醤油業          監査役 土屋勘兵衛 質屋・旧戸長          監査役 野村勘兵衛 青梅名望家</p> <p>明治29 <b>営業開始</b>          5・20 五日市町五日市69 内山安兵衛方</p> <p>明治30 <b>増資12万円</b>          10 八王子町大横2に出張所設置決定</p> <p>明治32 <b>五日市貯蓄銀行設立 資本金3万円</b>          6 頭取 土屋常七、専務取締役 松本伴次郎</p> <p>明治38 <b>本店移転</b>          7・23 五日市町五日市841</p> <p>明治39 <b>増資20万円</b>          下半期 株式配当金年8%の外特別配当2%</p>	<p>大正8 <b>増資50万円</b> 五日市貯蓄銀行を合併          下半期 立川村(現・曙町2-6)に支店開設、          頭取 松本伴次郎となる</p> <p>大正9 前頭取 土屋常七死去          4・2</p> <p>大正13 八王子の<b>第三十六銀行</b>に合併発表          上半期 五日市銀行閉鎖</p> <p>大正14 <b>第三十六銀行五日市支店</b>営業開始          上半期</p> <p>昭和2 <b>武陽銀行(本店青梅町)五日市支店</b>開          上半期 設される</p> <p>昭和17 第三十六銀行、武陽銀行の両五日市支店          5 とも<b>日本昼夜銀行五日市支店</b>となる</p> <p>昭和18 日本昼夜銀行五日市支店 <b>安田銀行五日</b>          1 <b>市支店</b>となる</p> <p>昭和19 安田銀行五日市支店 <b>埼玉銀行五日市支</b>          5・7 <b>店</b>となる</p>
--	---

起業ブームに遭遇し、各地に銀行設立が相ついだ。五日市銀行は明治29年3月設立をみた。ちなみに我国の普通銀行数は明治34年最高の1,867行(本店銀行数)に達したが、その過半が明治28～33年の間に設置されている。現在のトップ銀行三菱、住友ですらその創設は明治28,9年で、わが五日市銀行はこうした時流の中で発足した。実は2千に近い当時の銀行の大半が小資本の地方銀行で、以来不景気の波に呑み込まれたり、政府の合併指示に従ったりして数を減じてゆく。日本の銀行史は銀行の倒産合併史でもある。

ところで明治期に簇生した地方銀行の創設者はもと質屋等金融業を営む者が多かったようである。五日市銀行についてみると発足時の役員6名中3名までが質屋を営んでいた。(年譜参照 島田、野村両氏の家業不詳)頭取土屋常七は織物仲買商で、当時八王子と日本橋に店をもち、五日市随一の財力を有していた。また副頭取内山安兵衛は質屋兼大山持であった。五日市を代表する実業家と資産家が発起人の筆頭に並んだことによって株式募集もことなく進んだ。資本金8万円は地方銀行のうちでも小規模の方であるが、三菱、住友の資本金が100万円と知ればその価値がわかつた。1株50円は現在の金に換算すると2,30万円にも当ろうか。発足時の株主81名中現五日市町在住者は42名、みな町内各地区を

代表する有力者であった。なお店舗は当初内山安兵衛方を借り、明治38年土屋常七宅前(現モリタ薬局)に移転している。

五日市銀行の特色の1つは開店早々の明治31年八王子に支店を設けたことで、この八王子支店はすぐさま本店をしのぐ取引高を挙げた。当時八王子機業界に強い影響力をもつ常七の力によるものであろうが、八王子支店の開設は頭取常七にとっても、仲買人常七にとっても好都合の一石二鳥の措置であった。ここで話を常七ならびに土屋家に転じよう。



▲五日市銀行八王子支店跡 八王子消防署

## 2 土屋家と常七

五日市の名門旧家土屋家はもと武田家旧臣の系譜といわれ、五日市村西端の大番場と呼ばれる家と村の中央に並ぶ上・下の三土屋家から成る。うち下土屋が江戸初期より五日市村の名主を勤めた。明治期の当主勲兵衛（1832-1909）は幕末慶応の打ちこわしに防衛責任者として当り、明治に入るや戸長、県会議員を務め、一頃は民権運動のリーダーにも推された。五日市の地番は下土屋家を1番地としている。

常七（1838-1920）は勲兵衛の実弟で上土屋の養子となり家業の織物仲買業を大きく伸ばした。上土屋の財力は質屋を営む下土屋をはるかに凌駕したといわれた。昭和17年元店員たちが常七をしのいで顕彰碑を菩提寺開光院に建てた。これに基づき彼の業績人物を推測してみる。常七は12才より30才まで相州（神奈川県）厚木の溝呂木家に奉公したという。溝呂木家は厚木村の名主役のかたわら呉服、肥料を商う大店で、特に幕末期の当主九左衛門（八王子成内家の出）は人格識見ともに秀でた人物であったと聞く。常七は人格形成期にこの九左衛門の薫陶を受けた模様である。30才まで勤めたからには腕っこきの番頭として織物取引の経験をつんだことであろう。厚木は生糸と織物の町八王子に近く、外国貿易も始まった時節であった。

彼は明治元年、御一新を機に五日市にもどった。一時兄勲兵衛とともに民権運動にも関係しているが、政治活動より文学活動を好み漢詩グループに加わっている。彼の真骨頂は理財の道にあり、旁々風流も解したということであろう。彼は上土屋の家業を継承するや魚が水を得たように活動をはじめ、明治26年八王子、同28年日本橋に支店を設けた。八王子は仕入店、日本橋は販売店であろう。碑文の表現によると「店員数十名、年商数百万、販路は京阪より遠く鮮満に及ぶ」とある。多少の誇張を差引いてもスケールの大きい商いをしていたことが窺える。五日市銀行の設立は彼の活動期と一致し、資金はいくらあっても足りない時である。彼が銀行をどのように活用したかは営業報告書などから窺えない。従って推測の域を出ないが、後に彼の後継者が銀行資金を恣意的に流用し、五日市銀行の命脈を断つことになったその遠因を、銀行と土屋家とのあまりに接近した間柄に求めたくなる。地方銀行破綻の原因の多くが、オーナーと銀行との癒着にあることは銀行史の示すところであるが、同じ癒着でも才と運があれば銀行に繁栄をもたらし、なければ大害をもたらすという例証にもなるか。ところで常七は大層有徳の人であったようである。碑文による

と育英のためには費を惜まず、よく店員を育てたとある。嗣子大次郎は常七の恪勤さと理財の才を継がず、風流の才のみを受け継いだようだ。大次郎の養子五十五の代に破局が訪れるが、その前に五日市銀行の営業状況を見よう。

### 3 五日市銀行の経営 一景気の波にもまれて一

バターか大砲かという言葉がある。軍需と民需は両立しがたいという意であるが、日本経済の実態をみると、戦争時のみ好況で平和時は常に不況に悩まされている。大砲のあるときだけバターにありつけたようである。

五日市銀行設立の明治29年は日清戦争景気の頂点で、翌30年より下降、34年には金融恐慌が発生し、各地の銀行が取付（預金引下げ）にあって倒産している。五日市銀行は開店早々試練にあったが、もともと一般預金は少く、貸出は株式資本金を中心に運用しているので取付騒ぎはさ程恐くない。しかしこれは自慢できる話ではない。その後も預金の伸びはスローテンポで、自己資本主導型を脱し切れないまま終局を迎えたが、これが大方の地方銀行の実態で、近代銀行に脱皮するためにいずれ合併は避けられない途であった。

さて営業報告書には「営業の景況」という欄がある。これをみると「生糸の値は下ったが木材の取引好調」とか「木材は滞貨値くずれしたが幸に織物取引活況を呈し」とか書かれており、五日市銀行の背景をなす地場産業の商況がわかると同時に、銀行が木材・生糸・織物と浮沈をともししている状況も知られる。

明治38年、日露戦争によって待望の大型景気がやってきた。五日市銀行は39年下期特別配当2%（合計年10%）を付し、20万円に増資を発表している。ところで当時の八王子店の状況をみると金銭出納額は本店の数倍（39年下期10倍）に達している。一方利益は半期で支店計1万円程、内訳は本店がやや多い。金利をみると本店日歩3銭8厘～3銭に対し支店3銭2厘～2銭5厘と大巾の差がある。八王子には競合する銀行もありサービスも必要であろうが、このはっきりした格差には土屋家の意向が感ぜられる。八王子支店は土屋家とはたや機屋達の銀行といった色が濃い。

ところで景気は明治39年末から崩れ、以来なべ底型の不況がつづくが、第一次大戦の勃発により低迷を脱し、大正8、9年未曾有の活況を呈するに至った。五日市銀行は大正8年、五日市貯蓄銀行を合併、資本金50万円に増資、北多摩郡立川村に新規の支店を開設している。



▲五日市銀行立川支店跡 立川駅北口正面

なお頭取は土屋常七が引退し、松本伴次郎が後を継いだ。

五日市貯蓄銀行はもともと五日市銀行と店舗も頭取（土屋常七）も一緒、株主まで略々一致するシャム双生児といった銀行である。従って合併に何ら支障はない。一般に貯蓄銀行は預金利子をやや高めにして零細な積立貯金を集める銀行であるが、統合は五日市銀行の資力を増し、足腰をより丈夫にする狙いといえる。ちなみに当時の全国地方銀行資本金平均額は凡そ60万円であった。

新頭取松本伴次郎は五日市の老舗和泉屋の当主で貯蓄銀行専務、一時は五日市町長も勤めた篤実な人物である。また常七は伴次郎の媒酌人という間柄でもあった。

伴次郎に後を託した常七は翌九年に病没している。

## 4 破 局

景気の山は高ければ高いほど谷も深い。大戦景気が未曾有であっただけに、その反動もすさまじかった。大正9年3月株式暴落を契機に恐慌に入ったが、半年の間に生糸の値は3分の1、米は2分の1に値下りした。当時の五日市銀行の営業報告を拾い読みしてゆくと（数字は大正年）、「取引ハ依然トシテ閑散ヲキワメー10上」「各業界ノ不振ハ其極ニ達シー11上」「当地方主要産物タル織物木材ニ至ッテハ益々逆境ニ沈淪シー11上」等の文句に出会い、「木材の売行ハ一時杜絶ノ有様ー12上」「八王子織物ノ如キハ一部工場休業ー12下」従って五日市銀行の貸出金は「回収不円滑ー12上」と認め、「三、四銀行休業ー11下」「一、二銀行破綻ノ不祥事ヲ見ルニ及ンデー層ノ不安ヲ感ゼシメタリー12上」と書いている。暴風雨圏を航行する船の船体のキシミが聞こえる感がある。こうした状況下に八王子支店を舞台に土屋五十五による株式投機の失敗が演ぜられた。土屋家は大次郎の代に資産経営とも悪化しており、若い養子五十五が不況に抗し頹勢挽回を謀ろうとして暴走したようである。

五日市銀行の最後の報告書（大正13年上期）は

「不幸八王子支店ニ於テ左表ノ如キ欠損ヲ計上スルノ止ムナキニ至リー」とし第三十六銀行との合併を告げて終っている。決算表をみると八王子支店の欠損額は17、506円で、本店立川支店の利益で相殺し、当期純益金9、656円を計上している。これは明らかに作為された数字である。預金者の動揺を恐れ真相を覆い隠している。当時の土屋家の負債を80万円という人もある。これも不確かな数字で、こうした話は得てして誇大になり易いが、いずれにせよ八王子支店がこの絶望的な負債の主要な貸手であったことは間違いない。上下両土屋家は台所道具に至るまで売立が行なわれ、一さいを失なった。下土屋は上土屋に連帯した。五日市銀行も休業に入った。

頭取松本伴次郎は一時は山にこもって帰らず、狂乱の体であったという。昭和11年和泉屋へ嫁入した松本とみさんによると其頃まだ五日市銀行関係の負債2万円が残っていて、利息を払いつづけ、最終的に方が付いたのは昭和16,7年という話である。五日市銀行の筆頭株主で破産直前まで専務取締役であった池谷精一家の記録によると、1株50円につき4円23銭の清算金が割戻されている。株主たちに戻った金は10分の1にも足りない額であった。だが両土屋家の売立をみては怨嗟の<sup>なみだ</sup>声もそこそこに経済社会の冷酷さに息を呑む体ではなかったか。

池谷家でも役員としての責任を持山の一部をもって償っている。「銀行の役員にだけはなるなよ、というのが父の残した言葉でした。」と息秀夫氏は語られた。

大正14年春、五日市銀行は第三十六銀行五日市支店として再出発した。預金者が無傷ですんだことが暗い悲劇のフィナーレに点った唯一の灯火であった。

## おわりに

B 銀行の破産で今では考えられないわね。

A 昔は五日市銀行と同じ悲劇が全国あちこちで見られた。それを乗り越え、現在やっと一応安定した銀行が持てるようになった。

B 景気の波は今でもあるでしょ。

A これも以前のようなナマの烈しきは防げるようになったが、経済界には悲劇の種はいくらでもある。それに経済が世界規模に広がったから、広い視野と機敏な対応が一段と必要になってきた。今度悲劇が生まれると、スケールはずっと大きいからね。

（五日市銀行資料、埼玉県立文書館収蔵。参考図書『地方銀行小史』土屋喬雄監修。故人敬称略、文責石井）